

臨床美術(クリニカルアート)を地域支援に生かす実践研究

牛丸和人

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(令和6年1月10日受理)

Practical research on the application of clinical art to community support.

Kazuto Ushimaru

(Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyusyu University Junior College)

(Accepted January 10, 2024)

Abstract

Practical research on the application of clinical art to community support.

(1) To expand the use of clinical art to prevent dementia and delay its symptoms through workshops for the elderly and support staff at nursing care facilities and dementia prevention cafes.

(2) To connect the use of clinical art to the expansion of diversity through joint workshops with Japanese and non-Japanese participants at cross-cultural exchange events.

In this practical research, I considered it desirable to examine the effectiveness of the workshops from an evidence and narrative perspective, rather than following the method of measuring the effectiveness of care in art therapy, and reinforced the evidence by utilizing observational records and a narrative approach, rather than relying solely on numerical data.

Key words: 臨床美術的アプローチ: Clinical art approach
地域支援: Community support
異文化交流: Cross-cultural exchange
指導者の資質向上: Improvement of instructor's qualities
自尊心: Self-esteem

1 研究実践の目的および研究倫理

- (1) 認知症予防カフェや介護施設等における高齢者や介護現場の支援スタッフ等に対するワークショップを通して、認知症の予防や症状の遅延に向けた臨床美術活用の拡大につなぐ。
 - (2) 異文化交流イベントにおける日本人や外国人合同のワークショップを通してダイバーシティの広がりに向けた臨床美術の活用につなぐ。
- 本研究は、西九州大学短期大学部研究倫理委員会による承認を得て実施した(23NTD-03)。

2 研究実践の実際

(1) 臨床美術(クリニカルアート)と他のアートセラピーとの違い

筆者は、日本臨床美術協会のセミナー及び実技講習会を受講し 2020 年 11 月に臨床美術士 5 級の資格、2022 年 10 月に臨床美術士 4 級の資格を取得すると共に臨床美術学会 (The Society for Clinical Art) の理念に基づき臨床美術の実践研究を継続している。1996 年に大宮市医師会市民病院で開始された臨床美術は、当初認知症患者のリハビリプログラムとして提供された。そのことを契機に介護をしている家族の心理的ケアとしても利用され、現在では保育園、小学校、大学、地域社会でもそれぞれにおける「包括的なケア」の手段として注目されてきている。ここで触れておきたいのは臨床美術が様々な現場で利用されているアートセラピーとは似て非なるものということである。例えば、多くの高齢者施設においては日常的に様々なアートセラピーがアクティビティケアの一つとして行われている。しかしながら Deshmukh SR, Holmes J, Cardno A (2018)¹⁾ の「認知症患者に対する芸術療法」では「芸術療法と他の活動の比較において、記憶または他のほとんどのアウトカムは明確な変化が見られなかった。」¹⁾ という結果が報告されている。認知症患者に対するアートセラピーのエビデンスは、ランダム化比較試験 (RCT) では方法論的に限界があり、エビデンスの検証は困難であるとされたのである。近年、認知症施策推進大綱の施策に基づき、予防に関するエビデンス、科学的効果の蓄積がなされており、ケアの効果の検証も求められている。また経済産業省によるアートと経済社会について考える研究会報告書²⁾においても臨床美術士(全国に約 2300 人)の活動が公的に注目され始めている。このような状況下、高齢者施設の現場に限らず、さまざまな場所において臨床美術のセッションを行う臨床美術士は、アートの特性や参加者にもたらす影響について、専門的な知識をもっておくことが極めて重要である。なぜならば臨床美術はアートによる

「Person-Centered Care」における質の向上、そして Well-being の向上を図るものであり、単なる造形遊びや図画工作の域に留まるものでもなく、完成した作品によってクライアントの心理状態を把握したり治療したりするものではないからである。そのため臨床美術士の多くはワークショップの効果をアートセラピーのケア効果の測定方法に倣ってではなく、エビデンスとナラティブな視点から検証する方法を選んでいる。数値データのみならず、観察記録やナラティブなアプローチを活用することによりエビデンスを補強するという方法である。今回の実践研究も、筆者は客観的な情報(数値化)と参加者の行動観察、感想をもとに各ワークショップの効果を検証することにした。

3 臨床美術ワークショップの実際

(1) 認知症カフェにおける実践

- ①場 所 「認知症予防カフェ(ボンド・アート・カフェ)」多久市
- ②参加者 ケアマネージャー(2名)、生活相談員(1名)、介護士(2名)、認知症地域戦推進員(1名)、高校生(2名)、中学生(1名)、小学生(2名)、高齢者(10名)
- ③実践日 令和5年11月4日(土)
- ④ワークショップの内容
多久市北多久町のボンド・アート・カフェで定期的に関われている「認知症カフェ」において認知症の予防に興味関心がある高齢者、ケアマネージャー、介護士、生活相談員、臨床美術に興味関心がある高校生、中学生を対象に実施した。筆者のゼミ生2名もサポーターとして参加した。内容は色紙に「クレパスや割り箸を使って秋を描く」ワークショップである。「秋を描く」という題材で色紙にクレパスと割り箸によるスクラッチングで紅葉を描くというものであった。描画に対して苦手意識が強い参加者がいるということを前提に「好きなように」「自由に」といった抽象的な言葉は極力使わずに、プログラムに沿って参加者の反応を見ながら進めた。また、参加者の内訳が小学生から高齢者という年齢的に差があったため「右脳の活性化が認知症の予防につながる」「五感を生かしてコメントをし合うことが自尊感情の高まりにもつながる」という臨床美術の趣旨がうまく伝わるような言葉かけを随時行った。主催者からは高齢者同士の会話や笑い声がいつもに増して多かったという観察結果も得られた。このワークショップはNHK 佐賀放送局から取材があり6分間の特集番組として放送された。視聴者からの反響が大きかったため再放送された。(図1、図2)

⑤アンケート結果（筆者作成）

ア 臨床美術を知っていましたか

- ・知っていた 3名（14%）
- ・知らなかった 18名（86%）

イ 臨床美術のどこに共感しましたか

- ・苦手意識を持つ人に配慮しながら進めていく
- ・誰もが参加できるレベルの題材や技法が使われる
- ・他者と比較したり競争したりしない
- ・褒めるのではなく五感を使った言葉かけをする
- ・その他

ウ 臨床美術は右脳への刺激や自尊感情の高まりに効果があると思いますか

- ・思う 19名（90%）
- ・どちらかと言えば思う 2名（10%）
- ・あまり思わない 0名（0%）
- ・全く思わない 0名（0%）

エ 臨床美術をできることから仕事や生活に生かしてみたいですか。

- ・そう思う 16名（76%）
- ・どちらかと言えばそう思う 5名（23%）
- ・あまり思わない 0名（0%）
- ・全く思わない 0名（0%）

オ 自由記述から

【介護士・ケアマネージャー・認知症地域支援推進員・高校生】

- ・施設に臨床美術のワークショップを取り入れてみたい。
- ・右脳を使うというのが新鮮で苦手意識から解放された。
- ・他人と比べない評価しない、言葉をかけ合う、五感を使ってコメントするというのは初めての体験で楽しかった。施設の利用者にもこの感覚を体験させたい。
- ・臨床美術は子どもから高齢者まで誰もが無心で取り組めると感じた。

【高齢者】

- ・楽しかった。またやってみたい。

- ・楽しく絵をかくことができとてもよい一日になった。
- ・とても楽しい時間を過ごさせてもらったことに感謝したい。
- ・老人会などでもこのような活動ができれば有難い。
- ・競争して描くのではなくみんなでゆっくり参加できたのが楽しかった。
- ・若いころ絵を描くのが好きだった自分を思い出した。
- ・何もできないと思い込んでいた。まだまだやれることがたくさんあると感じられて嬉しかった。

⑥考察

このワークショップは、認知症の予防に興味関心がある高齢者と現在介護施設などでサポートを行っている職員、そして将来対人支援職を希望している中高生等を対象に行った。アンケートの結果からは、臨床美術に対する認知度が低いということが分かる。「知っていた」と回答した3名も臨床美術では図画工作や美術の授業で学ぶモダンテクニックを多く利用するために、提供される技法そのものを知っていたという捉え方であった。体験しての感想としては、介護士・ケアマネージャー・認知症地域支援推進員・高校生からは「右脳を使うこと」「自尊感情を高める言葉かけをすること」「老若男女誰もが取り組める題材であること」へ共感したという感想が多くみられた。また体験を通して参加者全員が「右脳への刺激や自尊感情の高まりに効果がある」と感じ「できることから仕事(生活支援・介護)や生活に生かしてみたい」と回答している者もあった。一方、認知症予防に興味があり参加を希望した高齢者も全員が「右脳への刺激や自尊感情の高まりに効果がある」と感じたと回答しており、感想も全てがポジティブなものばかりだった。客観的な情報(数値化)と参加者の感想から、このワークショップは臨床美術への理解を深めると共に、認知症の予防や症状の遅延に向けた臨床美術の活用拡大につながる実践であったと思われる。

図1 「認知症予防カフェ」のチラシ



図2 NHK佐賀放送局ニュースから



(2) 唐津地区地域リハビリテーション広域支援センター研修会における実践

- ①場 所 唐津済生会病院（唐津市）ZOOM 利用のハイブリッド・後日オンデマンド
- ②参加者 理学療法士（5名）、介護士（1名）、行政（2名）、技師長（1名）
- ③実践日 令和5年11月9日（木）
- ④ワークショップの内容

唐津済生会病院において開催された唐津地区地域リハビリテーション広域支援センター研修会において臨床美術のワークショップをして欲しいという担当責任者からの依頼で実施した。参加者の内訳は理学療法士、介護士、行政職、技師長といった介護現場においてサポートを受ける側ではなく、する側の人材ばかりであった。そこで今回のワークショップでは参加者各々が高齢者であるというイメージで臨床美術を体験し、これが認知症の予防や認知症の症状の緩和、遅延に利用できると感じるか否かについて意見をもらうことにした。

⑤アンケート結果（済生会病院作成）

ア 臨床美術を知っていましたか

- ・知っていた 0名（0%）
- ・知らなかった 9名（100%）

イ 臨床美術（クリニカルアート）は、高齢者や介護現場（入所者、外来者）に対する認知症の予防や進行の遅延、自尊感情の高まり等に利用できそうだと感じましたか

- ・そう思う 8名（89%）
- ・どちらかと言えば思う 1名（11%）
- ・あまり思わない 0名（0%）
- ・全く思わない 0名（0%）

ウ 自由記述から

- ・とても参考になる研修だった。今後施設でも臨床美術をやってみたい。
- ・患者は勿論、自分自身の気持ちを整えることにも役に立ちそうだった。
- ・利用者への声掛けの仕方はクリニカルアートだけで無く、日頃の関わりにも活用できるものなので勉強になった。
- ・これまでは、言葉かけでは誉めることを優先していたが、これからはゆっくりと関わりながら五感を使った言葉かけを心がけたい。
- ・童心にかえり心地よい時間を過ごすことができた。時間が足りないくらいだった。そして、自分の介助対象者への関わり方の硬さにも気づけた。介護予防教室などでも臨床美術が活用できたらと思った。

⑥考察

アンケートの結果からは、臨床美術に対する認知度は

低いということが改めて分かった。しかしながら、自らを高齢者とイメージしてのシミュレーション体験を通して、参加者全員が「臨床美術（クリニカルアート）は、高齢者や介護現場（入所者、外来者）に対する認知症の予防や進行の遅延、自尊感情の高まり等に利用できそうだ」と回答している。そして、臨床美術をそれぞれの施設でも何らかの形で取り入れていきたいという積極的、肯定的な意見が多くきかれた。今回は参加者の内訳は理学療法士、介護士、行政職、技師長であり、サポートをする立場の人材のみであったが、体験を通しての客観的な情報と参加者の言葉から、このワークショップは臨床美術への理解を深めることや、介護現場等における活用の広がりに対し有効な実践であったと思われる。（図3、図4）

図3 事前に講義を聴く参加者



図4 ワークショップ後のシェアリング



(3) 「異文化交流ワークショップ in Taku」(主催：佐賀県国際課 共催：多久市、西九州大学短期大学部)における実践

- ①場所 多久市まちづくり交流センター「あいぱれっと」
- ②参加者 外国人20名、日本人（子ども含む）50名
- ③実践日 令和5年8月6日（日）
- ④ワークショップの内容

佐賀県国際課より外国人と日本人の異文化交流を多久市で開催する際の協力依頼があった。佐賀県国際課によると、多久市の外国人住民は増加傾向にあり、今年1月1日時点で243人となっている。人口に占める外国人の割合は鳥栖市、基山町に続いて県内で3番目に高いという理由で同市での開催が決定したということだった。そこで内容について協議を重ね、臨床美術を用いた異文化

交流のワークショップの内容を決定した。内容は「アートと日本語で外国人とふれあおう！」のキャッチフレーズで、多久市やその周辺に住む外国人と日本人との参加を呼びかけた。当日は多久市で働く外国人 20 名を含む約 70 名が参加し、アート体験を通して触れあった。筆者がコーディネーターを務め、ハート型のアート作品を作る簡単なワークショップで、アートをコミュニケーションのツールとして利用するワークショップだった。インドネシアやミャンマー、タイ出身の外国人と地域住民が一緒のグループになって作品を完成させた。完成した作品は「あいぱれっと」に展示された後、11 月末まで多久市中央公民館ホールに展示された。この取り組みはマスコミからも注目され、佐賀新聞や多久ケーブルテレビでも紹介された。また、このワークショップを契機に次年度、杵島郡江北町で同様のワークショップが開催されること決定した。

⑤アンケート結果（佐賀県国際課作成・実施）

【日本人（成人）アンケート回答協力者 17 名】

- ア このイベントに満足しましたか
- ・大満足 14 名 (74%)
 - ・概ね満足 3 名 (26%)
 - ・どちらでもない 0 名 (0%)
 - ・あまり満足していない 0 名 (0%)
 - ・不満 0 名 (0%)

イ このイベントで楽しかったことは何ですか（2 つまで回答可）

- ・外国人とのコミュニケーション 18 名 (84%)
- ・ハートづくり 9 名 (47%)
- ・外国人との出会い、つながり 8 名 (32%)

ウ 今後、このようなイベントに参加しようと思えますか

- ・参加したい 12 名 (63%)
- ・時間があれば参加したい 5 名 (37%)
- ・しない 0 名 (0%)

【外国人（成人）アンケート回答協力者 16 名】

- ア このイベントに満足しましたか
- ・大満足 13 名 (81%)
 - ・概ね満足 3 名 (26%)
 - ・どちらでもない 0 名 (0%)
 - ・あまり満足していない 0 名 (0%)
 - ・不満 0 名 (0%)

イ このイベントで楽しかったことは何ですか（二つまで回答可）

- ・日本人とのコミュニケーション 12 名 (75%)
- ・ハートづくり 13 名 (81%)
- ・日本人との出会い、つながり 10 名 (63%)

ウ 今後、このようなイベントに参加しようと思えますか

- ・参加したい 10 名 (58%)
 - ・時間があれば参加したい 7 名 (42%)
 - ・しない 0 名 (0%)
- エ 今後日本人や他国の人ともっと交流したいですか
- ・はい 16 名 (100%)
 - ・どちらでもない 0 名 (0%)
 - ・したくない 0 名 (0%)

⑥考察

異文化交流にアート（臨床美術）を取り入れるという実験的なワークショップであった。当初、まったく面識のない外国人と日本人（成人・子ども混在）が一つのグループの中でコミュニケーションがスムーズにとれるのか不安があったが、非常に積極的な交流ができていた。参加者の感想から、その理由として以下のようなことがあげられる。「お互いに簡単な日本語で会話できた」、「老若男女誰もが制作できるアート教材であったためにリラックスできた」、「作品の出来栄への競争ではなく互いの思いを共有するツールとしてアートが利用された」、「互いの作品を同じボードに貼ることで連帯感が生まれた」、等である。日本人、外国人それぞれに実施したアンケートの結果からも、双方が作品作りそのものよりも、作品作りを通してお互いの関係が深まったことを喜んだということが分かる。作品を完成させるという目的だけではなく、アートをコミュニケーションのきっかけ作りのツールとして利用したり、作品の優劣を競い合うのではなくお互いの作品を愛（め）で合うツールとして利用したりするという臨床美術のプログラムが異文化交流にも生かせることが分かった。

図5 イベントポスター



図6 新聞掲載記事(佐賀新聞)³⁾



4 実践研究の成果と課題

目的①「認知症予防カフェや介護施設等における高齢者や介護現場の支援スタッフ等に対するワークショップを通して、認知症の予防や症状の遅延に向けた臨床美術活用の拡大につなぐ」については、認知症カフェや唐津済生会病院におけるワークショップの参加者アンケート(数値)や感想から、その目的は達成できたと捉えている。現在、フィンランドでは政府の新たなコンセプトとして、高齢者に対する文化的なアプローチがあげられている。高齢者施設、介護施設、病院等において高齢者のアートを用いて Well-being を高めるという取り組みである。現在日本においても、臨床美術士の中には医師や看護師、介護福祉士、臨床心理士等の免許や資格を持つ者が少なくない。今後は、医療や介護に携わる人材が臨床美術士の招聘によるワークショップの開催に留まらず、臨床美術士の資格を取得し各職場で実践を展開していくような啓発活動も行っていく必要がある。

目的②「異文化交流イベントにおける日本人や外国人合同のワークショップを通してダイバーシティーの広がりに向けた臨床美術の活用につなぐ」についても、佐賀県国際課と連携したワークショップにおける参加者アンケート(数値)や感想から、その目的は達成できたと捉えている。

臨床美術の目的の一つが制作活動を通して自尊感情(セルフエスティーム)を高めることにある。大手企業の凸版印刷では新入社員 600 人に対して臨床美術のワークショップ「アートサロン」を実施している。加えて「社員間アートサロン」、育児休業中の社員と子ども向け「はぐくみアートサロン」「親子アートサロン」等も開催している。臨床美術をコミュニケーションの深まりやセルフエスティームの醸成、アート思考の養成に活用しているのである。今回の筆者の実践は臨床美術をダイバーシティーにつなぐ試みであったが、今後もさまざまな現場で臨床美術の実践研究を展開していきたい。

5 上記以外での令和5年度臨床美術ワークショップ実施履歴

- ・グループホーム三線 入所者・通所者対象ワークショップ特定非営利活動法人らいふステージB型作業所(福岡県小郡市) 2023.7.27
- ・放課後児童クラブ児童対象アートワークショップさんこう児童クラブ「西九州大学佐賀キャンパス生涯学習センター」(佐賀市) 2023.8.3
- ・専門講座介護に生かす臨床美術ワークショップさがサポセンター「生き生き館」(佐賀市) 2023.8.3
- ・2023 建国大学(韓国)留学生夏期日本文化研修

- プログラム「アート体験異文化交流」ワークショップ 西九州大学短期大学部 美術工芸室(佐賀市) 2023.8.4
- ・規模保育園みらい園児対象ワークショップ 一般社団法人 小規模保育園みらい(小城市芦刈町) 2023.8.17
- ・放課後児童クラブ児童対象ワークショップ 放課後児童クラブ E・T クラブ(長崎県波佐見町) 2023.8.18
- ・江北町放課後等デイサービス SEED 通級児童対象ワークショップ 西九州大学短期大学部 美術工芸室(佐賀市) 2023.8.26
- ・唐津市立簗木小学校4年生児童対象ワークショップ 簗木小学校4年生教室(唐津市) 2023.9.5
- ・福岡県佐賀県大学図書館協議会南部地区研究会臨床美術体験ワークショップ 西九州大学短期大学部大会議室(佐賀市) 2023.11.20
- ・佐賀市多文化共生推進事業 児童・保護者・地域住民・外国人対象ワークショップ 佐賀市立嘉瀬小学校体育館(佐賀市) 2023.12.16

本文中に使用される園名、学校名、団体名及び画像掲載については全て当該機関代表の承諾済みである。

引用文献

- 1)Deshmukh SR, Holmes J, Cardno A, Art therapy for people with dementia, Cochrane Database of Systematic Reviews,13 (<https://www.cochranelibrary.com/cdsr/doi/10.1002/14651858/CD013572.pub2/full/ja> 2024.1.5 現在)
- 2) 経済産業省, アートと経済社会について考える研究会報告書 https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/art_economic/pdf/20230704_1.pdf 2023.7.4 確認
- 3) 佐賀新聞記事, 2023.8.8 (掲載許可済)

参考文献

- ・宇野正威, 臨床美術認知症医療と芸術のコラボレーション, 金剛出版, 2013
- ・金子健二, 認知症治療としてのアートセラピー, 臨床美術, 日本地域社会研究所, 2018
- ・特定非営利法人日本臨床美術協会, 臨床美術, JCAA NEWS 第 65 号, 2023.11.2